

ヘビに魅入られた幼少期のわたしとその後 ～定年を迎える巳年に振り返る～

きっかけとなった父の何気ない行動

私がヘビに初めて興味を持ったのは小学校2年生の頃でした。ある春の休日、当時住んでいた愛知県春日井市の農地を父と散歩中、目の前に現れたヤマカガシ(写真1)を父が捕獲し日本酒の空瓶に入れて見せてくれたことでした。当時の実家は水と緑と小動物の豊かな田園地帯のど真ん中にあり、そのためヘビが出ることも珍しくなかったのですが、そのたび周囲の大人たちは怖がって大騒ぎ、(それを見た子供たちも大人に習って騒ぎ)、その辺に落ちている棒切れなどで追い払い、あっさり叩き殺してしまうことさえ珍しくありませんでした。工学分野の研究者だった父はこのような先入観に満ちた蛮行には批判的で、「ヘビもただの野生動物であり、毒蛇ででもなければいたずらに怖がる必要はないことを教えるいい機会と、捕獲してみせたのだ」と後に言っていました(ただし父が捕獲して見せたヤマカガシは、当時は無毒蛇とされていたものの、後の研究でマムシやハブを凌ぐ毒を持つと判明するのですが…)。この父の行動が、生き物に対する好奇心の塊であった当時の私に、その意図をはるかに凌ぐ甚大な影響を



写真1 ヤマカガシ。日本に固有の毒蛇。私がヘビに興味を持つきっかけとなりました。

残すこととなります。それから、ヤマカガシが放されるまでの数日間、私は朝に晩に時間の許す限り酒瓶の中のヤマカガシと睨めっこを続け、すっかりその神秘的な姿かたちや行動・振舞いに魅了され、ヘビに対し特別な興味を抱くようになったわけです。

夢中でヘビの飼育観察を続けた小・中・高校期

私はほどなくして、近所に廃棄されていた業務用大型冷蔵庫の内壁の箱型プラスチック部分を取り出し、それに網戸をかぶせて蓋にすることで、ヘビを飼育するための大型ケージを作成しました。以後、自宅周辺の田畑からアオダイショウ(表紙写真)、シマヘビ(写真2)、ヤマカガシ、ヒバカリ(写真3)などを次々と集めて来てその中に幽閉し、飼育観察のまねごとをはじめたのです。ヘビを水の入った容器と共に中に閉じ込め、子供の頭で思いつく限りの餌になりそうなもの(ニワトリの卵や雛、カエル、フナ、鼠取りにかかったドブネズミやクマネズミなど)を放り込みました。そして得られた結果から、いろいろなことを学びました。まずヘビという生き物は、十分に落ち着いた状態でなければおいそれとは食べ物を口にしないこと、落ち着き空腹なはずでも脱皮前には食欲がなくなること、空腹の時でもヤマカガシは鳥の雛やネズミにはまったく興味を示さずカエルや小魚ばかり食べること、逆にアオダイショウは雛やネズミは食べるけどカエルは気が向かないと食べず、小魚にはまったく興味を示さないこと、シマヘビはネズミもカエルも食べるほかたまに共食いもし、ま

た他種の小型個体(アオダイショウの幼体やヒバカリなど)も食べてしまうこと、そして同じ種のヘビでも個体によって神経質さや攻撃性に著しい変異があること、などなど。こうした学びの日々のとどめは、ヘビがとてつもない脱走の名人であるということでした。それは小学6年生の夏のある日、飼育ケージをみると40頭近く入っていたヘビが3頭しかおらず、他は材質の劣化でできたケージの穴から逃げ去っていたのです。この経験は、直後に両親より落とされた大目玉、そしてその後しばらくご近所で頻発したヘビ騒動ともども、強烈に印象に残っています。その後、父・母の補助のもとでしっかりした飼育ケージを作成した私はヘビの飼育を再開し、飼育技術を向上させつつ、中学・高校を通してヘビの観察を続けたのでした。

希望進路は飼育家から研究者・教育者へ

このような幼少期の経験に始まったヘビへの興味・関心は、その後ヘビ以外の爬虫類や両生類へも広がり、受験予備校、大学、そして大学院と、気の合う友人ら、そして理解ある恩師の方々にも恵まれてますます深まって行きました。はじめの頃は、これらの動物の飼育下での繁殖を目標にし、就学後は飼育展示施設(名古屋市立東山動物園)に職を得ることを考えていました。しかし、そのような計画、人生設計は進学と共に爬虫類や両生類の生物学的研究を一生涯続けられる職を探し、また関連分野に興味を有する後進を、自分の経験に基づいて育てて行きたいとの内容へと変貌して行き、今に至ります。



写真2 シマヘビ。日本固有の無毒蛇で、いろいろなものを食べ、たまに共食いもします。



写真3 ヒバカリ。目立たない小型の無毒蛇で、オタマジャクシやミミズなどを食べます。

退職にあたって

ほどなく現職の定年を迎えるこの巳年に、これまでお世話になった恩師の方々、同僚・友人諸兄、名目上は研究指導をしたことになっていながら、その実、私自身がはるかに多くの学びとモチベーションをいただいた学生・院生諸君、そして何より幼少の頃、時にひどく戸惑いながらも精いっぱい私の学習を応援し支えてくれた両親に、心より感謝したいと思います。

太田 英利(自然・環境評価研究部)